

TOPICS
3

トピックス…③ わが国の輸入チーズをめぐる情勢の変化

わが国のチーズ需要は長年に亘り拡大傾向にあるが、これにともない輸入量も年々増加している。農林水産省「チーズの需給表」によると、2018年度のチーズ総消費量に占める輸入チーズの占める割合は86.4%（ナチュラルチーズベース）で、その後も輸入依存度は高まりつつある。そこで、わが国の輸入チーズをめぐる情勢の変化を概観してみたい。

輸入量は5年連続で更新

2019年のナチュラルチーズ輸入量は293,580トンで、15年から5年連続して過去最高を更新した。ナチュラルチーズの輸入量は、2008年のリーマン・ショック（米国の住宅バブル崩壊に端を発する国際金融危機）に際して一時的に大きく減少したものの、それ以外の時期は、長年に亘りほぼ増加傾向を示している（図1参照）。

また、ナチュラルチーズの輸入を金額ベースでも、数量ベース同様、長期的には増加傾向にある。しかし、金額ベースの増減傾向と数量ベースのそれには時期的ズレがみられる。たとえば、輸入数量が大きく減少した2008年に、引き続き輸入金額の増加がみられる。その背景には、中国国内において生乳が不足したため、中国が国際市場から脱脂粉乳を大量に購入したことによって、チーズの生産量が減少し、国際市場において輸出量が減少したことにより価格が高騰したことがある。

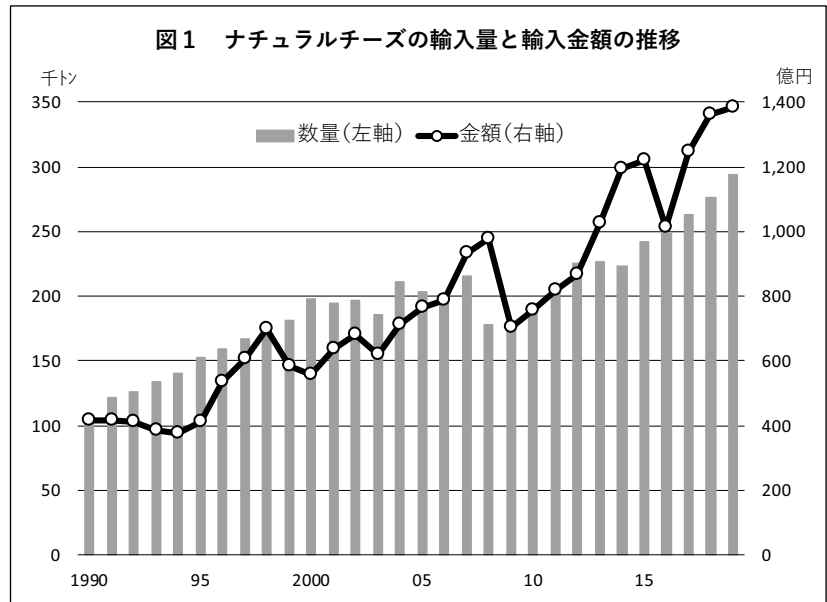
元来、チーズは生産国内において消費される割合が高く、生産したチーズを輸出できる国に限られるため、主要輸出国のいずれかの生産量（輸出量）が減少した場合に、国際市場は逼迫状態となり易く、価格が高騰する傾向にある。そのため、海外に供給の多くを依存しているわが国は、一部の主要輸出国の動向に影響を受けやすい立場にある。

主要輸入先の変遷

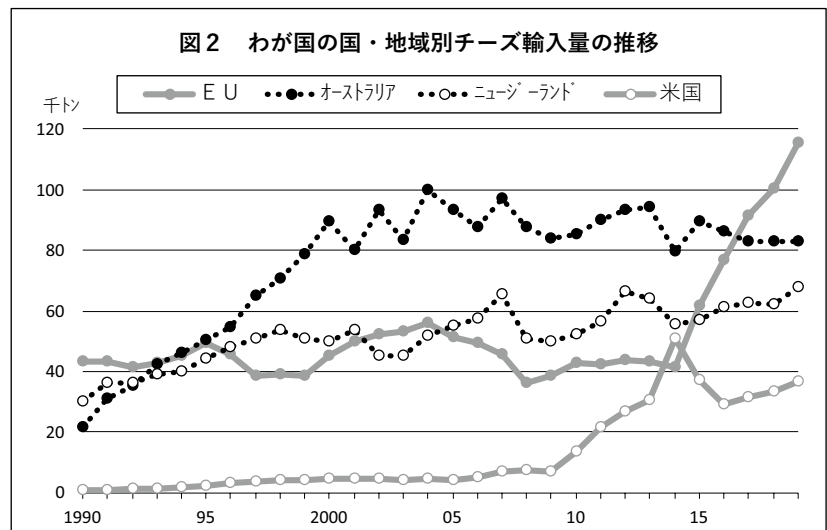
近年におけるわが国の主なチーズ輸入先は、EU、オーストラリア、ニュージーランド、米国の4か国・地域である。しかし、中長期的にみると、わが国の輸入チーズ市場における主要輸入国・地域の位置づけは大きく変化している（図2参照）。

数量ベースでみると、1993年までは主

にEUが最大の輸入地域であったが、91年から急激な伸びをみせていたオーストラリアが94年にEUを抜いて最大の輸入国となり、2016年まで首位の座を維持してきた。しかし、2015年以降に急激な伸びをみせたEUが、17年に再び最大の輸入地域となり、以降オーストラリアとの差を拡大している。



資料) 財務省「貿易統計」



資料：財務省「貿易統計」

注1) 輸入量はナチュラルチーズとプロセスチーズの合計。

2) 2019年は速報値。

日欧EPA（経済連携協定）が2019年2月1日に発効してから丸1年が経過した。この間、EU産チーズの輸入量は前年から1割以上増加した。20年4月からもう一段階関税率が下がるため、輸入量がさらに増加する可能性もある。

EUの国別では、原料用チーズが中心のオランダ、デンマーク、ドイツ、アイルランドが急激な伸びをみせ、オランダ、デンマーク、ドイツが上位3カ国となった。他方、高単価の直接消費用チーズが中心のフランスとイタリアも、順調な伸びを見せている。

他方、首位の座を明け渡したオーストラリアは、引き続き、チーズ輸出量の約半分をわが国に仕向けている。しかし、長引く干ばつによる生乳生産量の減少と人口増加などともなう国内需要の増加により、乳製品の輸出量が減少している。とくに、2018年1月以降の干ばつにより生産コストが上昇したため、乳用牛の淘汰が続いており、生乳生産量の回復には時間がかかると見込まれている。そのため、わが国にとって輸入しにくい状況になることも予想される。

また、乳製品の輸出大国であるニュージーランドは、わが国のチーズ輸入先として安定した地位を維持しており、オーストラリアに迫る勢いを示している。さらに、長年低水準にあった米国からの輸入量は、2010年から明らかな増加傾向に転じた。国内の消費が伸び悩んでいたことから、米国政府が輸出促進事業として補助金を配布したこともあり、2014年における米国からの輸入量が急増した。その後いったん減少したものの、再び増加傾向に転じている。

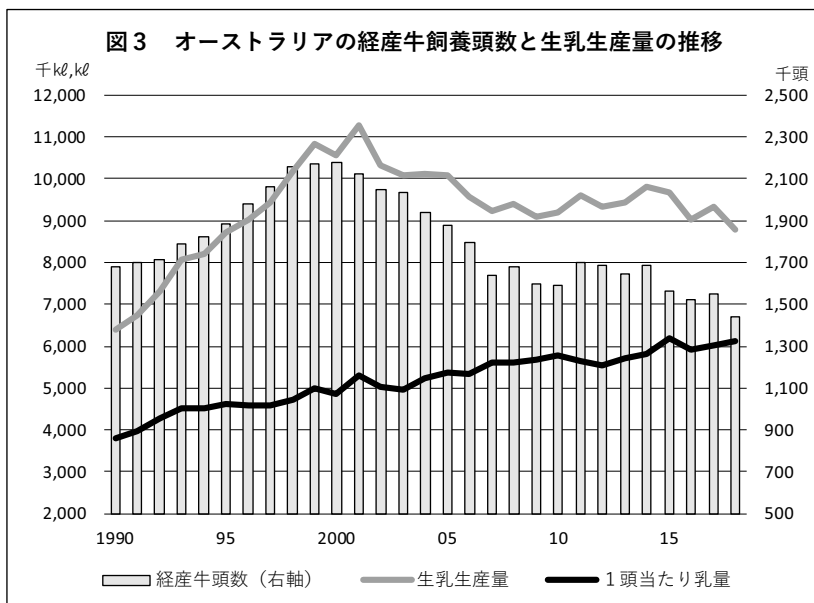
オーストラリア酪農の近況

オーストラリアは、わが国にとってチーズ、脱脂粉乳など主要な乳製品の安定的な輸入先国であり、同国の生乳生産の動向は、わが国の乳製品需給に少なからず影響を及ぼすことが見込まれる。すでに記したように、2018年1月以降、オーストラリア東部を中心に乾燥した天候が続き、ヴィクトリア州など生乳主産地の広範囲で、20年に一度と言われる深刻な干ばつが発生した。

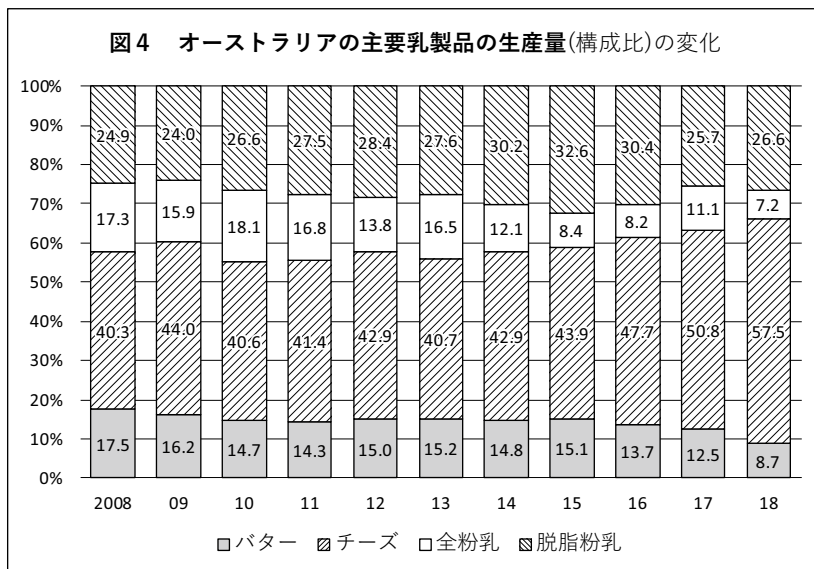
図3は、オーストラリアにおける経産牛飼養頭数と生乳生産量の推移を示している。経産牛飼養頭数は、2000年の2,176千頭をピークに減少傾向に転じ、18年には1,440頭となっている。この間、経産牛1頭当たり生乳生産量は順調に増加してきたものの、生乳生産量は2001年度（11,271千kl）以降、増減を繰り返

ながら減少している。2018年度（7月～翌6月）の生乳生産量は、前年度対比5.7%減の8,795千klであったが、7月から始まる19年度も減少傾向が続いている。2020年初頭に広範囲で降雨があったが、飼料価格は高騰しており、今後も経産牛飼養頭数は減少すると見込まれている（USDA "World Markets and Trade"）。

生乳生産量の減少傾向が続くオーストラリアでは、限られた生乳から最大の利益を生み出すため、変化する国内外の乳製品需給構造に対応して生乳の仕向け割合を変更している。図4は、直近10年間における主要乳製品の生産量（構成比）の変化を示している。これを見ると、市場性の高いチーズの仕向け割合が増加している一方で、全粉乳とバターとの割合が減少している。さらに、近年においては、低価格のチェダーチーズの輸入を増やし、収益性の高い自国産チーズを中心に輸出しているという。



資料：ABARES「Agricultural commodity statistics 2019」
 注1）生乳生産量は年度（7月～翌6月）の値。
 2）経産牛頭数は6月30日（1998年度までは3月31日）の値。



資料：ABARES「Agricultural commodity statistics 2019」